



Title	梅溪昇名誉教授に聞く : 大阪大学の思い出 (2)
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2009, 58(4), p. 103-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24466
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【資料】

梅溪昇[†]名誉教授に聞く一大阪大学の思い出（２）菅 真 城[‡]・阿 部 武 司[‡]

第２回聞き取り 2007年 9 月19日

於 梅溪氏宅（東京都小金井市）

創立期の阪大文学部の実情

阿部 それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

梅溪 今日は、先生からお尋ねの「創立期の文学部の実情」につきましては、前に触れたほかに、最近、松本評価・広報課長（当時）から聞いたんですが、浪高（旧制浪速高等学校）の昔の尋常科の建物に使っていたステンドグラスが見つかったとかで、最近の大学のインフォメーションにあったので、私も見ましたが、ああ、懐かしいのがあるなと思って。

菅 ステンドグラスは、共通教育の物理棟にあります。

梅溪 ありました。これ。

これは、私が浪高の一番新しい同窓会報を見ましたら、大阪大学イ号館の由緒とか、浪速高等学校尋常科の玄関を飾ったステンドグラスとか、こんなものが載っていて、私は尋常科の出身ではないんですけれども、ああ、懐かしいなと思ったんですね。

わりあいに建物はしっかりしていたんですけれども、何しろ戦時中を経過して、大阪大学の北校ということになっておりましたから、誰も手入れもしていなくて、私たちが文学部の建物として使ったときには、本当にお粗末なもの

で。

最初昭和23年（1948）9月、法文学部として出発、翌24年8月には文学部と法経学部に分かれ、法経学部はさらに昭和28年8月に法学部と経済学部に分かれたんです。したがって、3学部とも同じような状態だったんですね。経済で言えば、宮本又次先生が玄関に立っていらっしゃる写真を『五十年史』の写真集に入れたと思うんですね。

向こうの実験室などは、私は理科ではありませんし、尋常科の出身でなく、高等科入学者でしたから、使ったことがなく、松本課長にも聞かれたんですけれども、それは尋常科出身の連中に聞いてもらいたいと言いました。

その尋常科の連中というのは、僕が前から言っている曲直部寿夫くんとか、医学部の古い連中はみんな、ほとんど亡くなりましたので。山村雄一総長でもお元気であれば、それはすぐわかるんですけれども。したがって、残念ながらよくわからないんです。だけど非常に懐かしい。

イ号館も、もう建物としての期限がきているんでしょう。背の高い入り口のイ号館は、浪高の本館と言っていた。校長室や事務室、高等科の教室、講堂があった。

私ども浪高の卒業生としては、元総長の熊谷信昭さんがおられるので、熊谷さんに頑張ってもらって、何とか。

阿部 あの建物自体は、恒久的に残すようで

[†] 大阪大学名誉教授

[‡] 大阪大学文書館設置準備室講師

[‡] 大阪大学大学院経済学研究科教授

す。

梅溪 そうですか。ありがとうございます。

それから、昭和50年、浪高庭園を同窓会が寄付して文学部の前につくりました。これは浪高だけでなしに、大高（旧制大阪高等学校）の同窓会による大高の森もごぞいます。せっかく戦後に、2つの旧制の高校を北校・南校として大阪大学に包摂してもらったのだから、大変ありがたいと思っています。どうぞよろしくお願ひしたいと思っています。

そういう事情でやがて教養部ができたんです。

阿部 はい。

梅溪 文学部は、昭和23年9月に法文学部（旧制）の文学科として発足したときは、哲学が4講座。史学科は国史学が1講座しかなかったんですかね。文学科は、国文と英文と2講座。最初は、それから始まっているわけで。

このあいだ菅先生から聞いて、私も少し調べてみると、1949年（昭和24）に各地の26の国立大学に教育学部ができていたのですが、教育学部の講座がないというか、1講座ぐらいのところでも学部ができたそうですね。僕はそれがわからなかったのですが。

そのとき大阪大学では、教育学関係の講座が哲学科のなかに、教育の第一と第二講座としてできていますね。これができたのは、やはり昭和24年の4月でしょうね。

菅 たぶん新制が5月31日付だったので、そのときではないかなと思うのですが。

梅溪 ああ、そのときにできたんですね。

それで前にもちょっと触れましたけれども、なぜ教育学部ができなかったのかということなんです。とにかく、文学部の哲学科に教育学の講座ができることは確かで、やはり教育学部ということになると、文学部の教授会が関係せざるを得ないのですが、そのとき、まだ私は助教授で教授会には入れてもらえませんでしたから、実際の内情はわからないんですね。

だから、もしかすると、まだ文学部もわずかな講座でできた翌年の早々に教育学部の問題が起こったので、今村総長は、まず長年の宿願であった文科系学部の確立をはかろうと考えられて、教育学部をつくることに消極的だったのではないかと思うんですね。これは私の想像ですが。

菅 先週、国会図書館で調べてみましたら、やはり今村総長は、先ほど先生がおっしゃったようなことを言われていたようで、とにかく法文学部を一本立ちさせなければいけないから、教育学部もつくりたいことは、つくりたいけれども、先にしなくてはいけないことがたくさんあるんだということだったようです。

梅溪 ああ、そうですか。僕もそのことは、1回目にお話ししたあとで考えて、まだ文学部はできたてのほやほやで、法文学部から一本立ちさせる時期ですから、とてもそういうところに手が回らなかったのではないかと思うんですね。

それから客観的な条件としては、前回申しましたように、近くに池田師範と天王寺師範があつて、それが教育大学にどのような動きをしていたのか。僕はわからないのですが、特に南高の大阪高等学校も天王寺師範に近いですし、北校の浪速高等学校も池田師範に近いわけですから、そういうような関係も、はたらいたのではないかと思うんです。

前回も申したことですが、今村先生には着任後はよくお目にかかっていましたから、いまこういうことを聞かれるんだったら聞いておけばよかったのですが。

それから、教育学部の全国的な設置が、やはり占領政策と密接な関係があり、それはどのようなであったかという問題ですね。

菅 そうですね。

梅溪 戦時中のアメリカが行った日本の教育改革、新しい新制の大学にするための梃子入れがあつて、それにいままでの国立大学が協力を要

請されたのではないかと思います。

菅 ええ、そうですね。

梅溪 だいたい、そういう筋でしょうね。だから、まだほやほやの法文学部みたいなところに、教育学講座2講座もくれているわけですね。そして、その4年後に私が赴任したときにも、また教育学講座が若干増えていくのではないのでしょうか。

それで、前に言いましたように、私が赴任した1年あとに、時野谷勝教授が国史学の教授として着任されたんですよ。これは最初、僕の記憶では、教育学の第五講座の流用だったんです。本来の文学部としては教育学の講座が増えていくから、それを先発講座の複数化について流用するのに非常に便利だったわけです。

だから逆に教育学の関係者から言えば、哲・史・文にみんな流用されているという、あまり好ましからざる印象があったという雰囲気を、ちょっと私は感じたんですね。ですから、教育学側から言えば、最初からできたところに、流用されて、甚だ貧乏くじだということが1つ。

それから、教育学の関係の講座には教育心理とかいろいろあって、実験講座が1, 2, あったと思うんです。だいたいかつての文学部の講座は、みんな非実験ですから、実験講座に対し、講座比が1対3, あるいは1対4ぐらいになっていたかな。特にすべて理工学部の実験講座に比べれば、文学部の非実験1に対して、理工学部が4から5ぐらいだったと思います。

ですから、あとで申しますように、学部長時代に九国立大の文学部長会議で1番問題になっていたのは、この文学部の非実験講座の実験講座化で、連綿とやっていました。

また、教育学関係の先生方から言えば、せっかく自分のところが実験講座なのに、文学部の教授会で実験講座費を少し削られて、非実験のところへ回されているので、甚だ心外だというような感情は確かにありました。

そういうことが、その後、やがて教育学や社

会学が文学部から離れていく下地になっていると思うんですね。教育学関係から言えば、講座を流用されるうえに、講座費を削られること。そういう底流があったと私は思っているんですけどね。

なお、確か全国の教育学部長会議に、阪大は学部がないので教育学の各講座の教授が出席できず、これも関係教官にとり面白くないことであったと考えます。この辺は、のちの人間科学部への底流をなしているように思われます。

他大学停年教授の処遇

梅溪 さてその後、国史学に第二講座ができて、これまでの流用は終わり、教育学第五講座には、昭和35年に東大の教育学部教授の牧野巽先生が併任になられます。僕の考えでは、これが問題の発端です。

その2年後に、第五講座は教授が替わりまして、九大の教育学部教授の教育制度学の駒田錦一さんが専任教授になられます。したがって、牧野先生は併任を解かれたわけですね。ところが、その3年後の昭和40年に、今度は第五講座から駒田さんが第四講座に替わられ、そのあとへ牧野先生が第五講座の専任教授になられたんです。

それで、なぜ牧野先生が問題になったかというと、これはまた菅先生がお調べ下さったらけっこうなのですが、このときに文学部の教授会で問題になったのは、東大の停年教授を迎えるか、迎えないかという問題なんです。これは、もう大変でした。

このときは、ちょうど学部長が澤瀉久敬教授だったときですが、文学部の教授会が大変もめました。要するに阪大は63歳が停年ですが、東大は60歳だったということ。かかる先例を開くと、将来いろいろ問題があるという。これはもう、大変もめたんですね。

しかし結局、やはり東大からお迎えしよう

と。牧野先生をお迎えしたわけです。お迎えしたのはいいのですが、この牧野先生をお迎えしたとき、文学部長が守屋美都雄教授でした。この方は東大の東洋史の出身で、私より4・5年先輩ですが、守屋先生は牧野先生の講義を受講されていて、ご研究のうえでも非常に密接な関係があったんです。

私は助教授ですから、教授会の模様はわからないのですが、とにかく文学部の教授会で、停年教授を迎えるか、迎えないかということで、もめているということはわかっていました。

結局、迎えることになったのですが、その後、牧野先生からいろいろな構想が持ち込まれたよしで、教授会がどのように対応したかはわかりませんが、しかしあまりスムーズにいかなかったのも、守屋さんは大変苦しまれたようです。その最中に、脳溢血で急逝されたんですね。ですから、旧来の文学部では、守屋さんはそういう問題で本当に気の毒だったというようなことを言ったことがあります。

そういうことがありました、とにかく停年教授をお迎えしたことは事実なんですね。文学部にも、そういう前史があり、やがて人間科学部が生まれることになります。だから、別に歴史として書いてもらう必要はありませんが、そういういきさつがあったということなんです。

いま考えれば、停年は各大学で勝手に決めていたんでしょう。あのころ、岡山大学は65歳だったと思いますが、岡山大学が阪大の停年教授を迎えたかどうか。僕はそんなことはないと思いますが、大阪大学と東京大学のあいだには、そういうことがあったんですね。ご参考までに申しあげたいと思います。

人間科学部の創設

梅溪 では、私が学部長になったことに移させていただきますが、昭和49年4月から昭和51年3月までの2年間、私は学部長でした。そし

て、もう少し前の昭和47年ごろから、ここに書いてありますように、「人間科学部が創設されることになり、その結果、文学部より教育学科5講座と、哲学科所属の心理学2講座、社会学2講座が、人間科学部に振り替えられた」と。要するに、人間科学部ができたということになっています。

これは先ほど申しましたようなことでできたんですが、『五十年史』をいっぺん読んでいただいて。私も『五十年史』のプリントは松本課長からもらいましたけれども、最初、文学部の教授会では人文社会学部でやっていると思います。しかし概算要求としては、やはり法規がありませんでしたから、社会学部で要請していると思うんですね。ですから、その前段階の教授会で人文社会学部でつくったというのが本当だったのかどうか、それが僕はちょっと気になっていてね。

『五十年史』をつくったときには、僕は通史のほうの編集委員長をしていましたけれども、部局史の原稿は目を通しておらず、執筆者から出てきたのを、ただならべただけなので。そういうことで、また『百年史』をおつくりになられるご準備のときに、もし材料がありましたら、一度、そのときの教授会の議事録を確認しておいていただきたいなと思っております。

この人間科学部ができるときには、ちょうど哲学科教授の澤瀉久敬さんが学部長でしたけれども、これもいろいろもめて、「何が人間科学だ。文学部だって人間のことをやっているじゃないか」とか、その学部の名称をどうもっていかについていろんな議論がありました。

概算要求の手前では、文部省のいままでの形態は社会学部しかないから、それで行くんですけども、一方で人間科学部の関係のほうへ行かれる方は、やはり人間科学を主張されたんです。しかし、昔の古い、哲・史・文の文学部では、人間科学だけが人間をやっているわけではないし、文学部だって人間をやっているじゃな

いかというようなことを言って、ずいぶんもめたことがあります。

『五十年史』の人間科学部の原稿は、昭和24年哲学科の教育学第一講座の助教授から昭和27年教育学第一講座教授となり、さらに昭和38年には教育哲学・哲学史講座と改称の教授だった森昭さんが何といても、人間科学部創設の立役者であって、森昭さん自身が書かれたと記憶しています。

今度、私は、『五十年史』の人間科学部の創設のところを、改めてこの問題があったから読んでみたのですが、特に人間科学部の概説のところですね。終わりのほうに、この人間科学の名称や創設の理念のところ。ここのところを、阿部先生や菅先生に一度読んでいただきたい。

「人間科学の発想のヒントになったのは、アメリカの文化人類学などに見られるサイエンス・オブ・マン（science of man）の理念であったように見える」と。「見える」と書いてあるでしょう。

あるいはもう一つ、また別に、「サイエンス・オブ・マンの理念は、たしかに『行動科学』の理念にとって代わられたように見えるが、人間科学部の学部構想においては、自然科学的方法論の一元論をとる行動心理から、終始一線を画していたように見える。むしろ範としては、フランスにおいて急速に発達してきたシアン・ジュメンヌ（sciences humaines）である。これは人間を対象とし、経験的方法を重視する諸科学を総合する分類概念であり、『領域的には人文諸科学と相覆い、自然科学に対して開かれた態度をとる』ことを特色とする」と書いてあります。

これは森昭さんが書いたら、「見える」とか、「ように見える」とか書かないと思うんだけど。この辺の記述は私のような門外漢にはよくわからず、少なからず気がかりで、特に他大学の人が読んで、阪大の人間科学部の理念と

いうものが、どう受け取られているかですね。森昭さんの真意を正しく後世へ伝えるためにも、文学部でも、これはいろいろ問題があったので、この『五十年史』の叙述というものを、今度新しく『百年史』をご編纂の方には、一度ご検討いただきたいと思うんです。

九大学文学部長会議

梅溪 僕は昭和49年6月に国立九大学文学部長会議へ出たのですが、会議のなかでは僕が1番若かったと思います。そのときの当番校は東北大学でした。その席上で、今もって忘れられないことがありました。

北大の文学部長だった梅岡義貴先生は僕に、「梅溪さん、阪大の文学部というのは何でそんなに思い付きのことばかりやるんだ」と言われるので、「何でしょうか」と言うと、「人間科学部とか、ちょっと変わったことを君のところは考えるんだね」と。文学部から概算要求を出しているのですが、「だいたい阪大は、文学部の基本講座である言語学も持っていないじゃないか。宗教学もないじゃないか。そんなことで文学部と言えるのか」と、僕は面と向かって言われたんです。

「ああ、そうですか」と。「だけど、われわれは、まだできたてで、目下、講座増設に、拡充に努力しているところでございますから」と言ったのですが、ずいぶん阪大の文学部は奇想天外で、思い付きと思われていたんですね。

「思い付きの概算要求をして、それも文部省の役人だから、うまく食い付くものがあるね」とか言って、皮肉を言われたんですね。僕は、これが非常に印象的でした。

阪大の文学部は、もちろん戦後にできたわけですから、旧制並みに扱われていますけれども、実際は新制みたいなものですから、本来の旧帝大系の文学部からは、どのように見られていたかということが初めてわかり、僕は非常に

印象的でした。ああっと思ってね。

これは澤瀉さんや、よその古参の、もちろん僕の主任教授にも言いましたけれども、こういうことを言われましたと言うと、みんな黙っておられた（笑）。

それから、その翌年、昭和50年の九国立大学文学部長会議は、当番校が京大で、これも亡くなりましたけれども、文学部長はギリシャ文学の教授だった藤澤令夫さんでした。東大は井上光貞という日本史の教授で、井上さんと僕は同じ部屋で泊まったりしたので、あとでずいぶん親しくなりました。

このときは、前年のときのようなことを私に言われることはなかったのですが、本省（文部省）への要望書の主たる問題は、非実験講座の実験化と、もう1つは大学院を主体とする大学の設置要求で、これは両年度にわたっていますし、もっと前の学部長会議からもやっています。

この要望書は文学部に残っていると思います。僕の手元には、昭和43年の九国立大学文学部長会議の要望書があります。これはドイツ文学の田中健二教授が僕と心安かったので、僕より何代か前の文学部長ですが、僕にくださったんです。これを参考にして、この要望書を書けということで。このときに見ても、やはりそういうことが出てくるんですね。

そして、僕は昨日もこれを読んでいたのですが、これは学部に残っていると思うので、いっぺん読んでおいて下さい。というのは、僕の任期中の昭和49年、50年よりも、6年前の昭和43年、田中健二教授が学部長時代の要望書のほうが、大変面白いと思います。これは当番校が大阪大学なんです。「昭和43年5月10日、11日は、大阪大学が開催した。大学院を置く国立九大学、第16回文学部長会議において、協議のうえ一致した意見にしたがい、下記のように要望します」という内容です。

これには、第4学科の増設ということを言っ

ている。文学部は、哲・史・文の学科でしたが、この第4学科をつくってくれと。その第4学科というのは、「心理学、社会学の諸講座を中心とした6講座以上の新学科を増設し、4学科制とすることが望ましい」と言っています。

だから結局、人間科学部の問題から言えば、教育のほかに哲学科の心理・社会学も文学部から離れますが、すでに昭和43年ごろから、こういう問題が出ていたんですね。私は、これを読んで初めてわかりました。

そこで、私自身も大部以前のことで、この頃のことを忘れていましたので、改めて履歴書を調べると、私は翌昭和44年9月評議員併任と同時に大阪大学社会学部設置準備委員会委員となり、同年12月両委員を解かれています。それで先の阪大が当番校の本省への要望書にある第4学科の件は、この本学の社会学部設置準備委員会と関連していたということが出来ます。ともかく、この社会学部設置委員会は、のちの人間科学部設置の端緒だったといえるでしょう。この辺の『五十年史』の記述を再検討願います。

外国人教師の増員を

梅溪 それからもう1つ、これを読んで面白いのは、その他の要望として、外国人教師の増員ということを言っているんですね。前回に申しましたように、僕はアメリカから帰ってきてから、文学部の教授会で、まだ学部長になる前ですけれども、もっと外国人の専任教員を入れたらどうかと言っていたのですが、そんなことはとても認められませんでした。それから、もう何十年かたっているのに、いっこうに実現しないですね。これでは、ずいぶん格差ができると思うんです。

アメリカなんかは、阿部先生もご存じのように、例えば日本研究にお金を出す予算額がいくら、中国にいくら、中東にいくら、ヨーロッパにいくらと、お金の出し方によって、どこにア

メリカが重点を置いているかがわかりますよね。

いまは日本よりも中国にたくさん出しているでしょう。だから、そこへ留学生が派遣される。

私がアメリカへ行ったときは、まだ日本の景気がいいときで、ミシガンの教授がトヨタとかに寄付をもらいに来ていた時代ですから、日本にずいぶん金を出して、日本に留学生を送っていました。ですから、私たちもたくさんアメリカに友人や学生がいます。

こんにちの状況は私は全然知りませんが、私たちが現役でいたころの日本の大学には、外国人の専任教員なんてほとんどいない。

紛争後に、朝鮮語の専任教員を入れることが問題になりましたが、人選が難しく、とうとうできませんでした。九大が朝鮮語の専任を採用したと思います。

そういうことがあるように、いろいろアジアでは問題があるんでしょうけれども、アメリカでは、もうずいぶん自由に行われているようです。アメリカの公私立大学と、日本の国公立大学では事情が違いますけれども、もう国立大学法人になったのだから、もっとフリーに外国人を入れたらどうかと。昔、明治の初期には、東京大学にはお雇い外国人教師がたくさんいたんですから。

また釜洞総長の時代に、言語文化部の問題がありました。これも東亜の諸民族の言語や文化を研究するといった目的ではなく、要するに阪大の学内行政で、教養部の先生方の各学部への分属が難しいから、結局、言語文化部というものをつくったわけです。

分属問題には、文学部なんかが一番強行に反対しました。文学部は、英文、独文、仏文といっても各１～２講座ぐらいしかありませんから、教養部からどっさり教官が来られたら困るというので、文学部と理学部が１番反対したわけです。実に低次元の問題だったのです。

私は明治百年のとき、朝日新聞社がどんな仕事をしたらいいかと言うので、それは朝日新聞社も大阪なのだから、朝日新聞社が大阪大学に金をくれて、大学にも寄付講座を置いてくれて、ちょっと変わったことをやりたいと思うからと、そんな話をしたことがあります。受け付けてもらえませんでしたけれども。

僕は、これからの文学部が発展するためには、英、米、独、仏といった言語とならんで、やはり東亜の諸民族語とその文化の研究を展開する必要があると思いますね。

阪大文学部の場合は、私の１年先輩の東大東洋史出身の山田信夫さんが、ほとんどデッドランゲージといえるウイグル文書研究の専門で、所属の東洋史の第二講座の名前を昭和54年に「アジア諸民族史」に変えられたことがありました。山田さんはロシア語の文献を使用していました。しかし阪大の文学部には、ロシア語のできる学生タイピストがいないから、山田さんは神戸大学でロシア語を勉強している女子学生を、わざわざアシスタントにされていました。そんな状況だったんですね。

だから、これでこれからの日本が持ちこたえられるのかという感じでした。大阪なんかは特に、東京よりも中国大陸や朝鮮に近いんですから、これを何か今度の学長にでも頼んでほしい。

大阪外大との統合の評価

阿部 この10月に大阪外大が統合されて、語学の先生がたくさん来られますけれども、これは良いことと受け止めるのがよろしいのでしょうか。

梅溪 外大は歴史も古いですし、阪大の留学生もずいぶんお世話になったわけですから、合併されることに反対ではありませんが、どのように、いままでの阪大の語学の先生方と。

阿部 カルチャーが違うところが一緒になるの

ですから、コミュニケーションが円滑になるには時間もかかるでしょうし、先生方の問題意識が必ずしも共有されていないというようなこともありうるでしょうね。

梅溪 僕は一歴史屋だから何も知恵はありませんが、むしろハーバードの諸民族語研究所みたいなものを建てて、いままでの所属の殻を全部捨てて、新しい外大の先生も、いままでの阪大の語学の先生方も、一度ごちゃ混ぜにして、新しい考えの下に、新しい研究所組織をつくる、と。そのなかのセクションは、また考えて、新しい共同研究グループを決めてやられたほうが、いいのではないかという気がしますね。どうでしょう。

阿部 いまのところは、もともと伝統をお互い尊重し合おうということで、外大の先生方が世界言語研究センターという別組織に結集して出発すると聞いております。

梅溪 滑り出しはそうであっても、いつまでも「阪大・外大」では困りますね。

僕は、それぐらいのことをやらなければならないと思う。だから阪大も、何かお考えになられたら。そういう意味で、僕ら学部長時代のときの要望書はつまらないことばかり書いていますけれども、かえって以前の要望書のほうが面白いのではないかと考えましたね。そんなことで、ちょっと思い付きでございますけれども。

だから僕は1つ、ヨーロッパはかまいませんが、アジア諸民族研究所とか。外国語だから諸民族語と入れて、アジア諸民族語研究所とか、そういうものを一度皆さんでご議論されたいかなものかと。ちょっとこれは思い付きみたいですが、すでによく知られている山田教授の業績もあることです。そのように考えますね。

美学科の創設

梅溪 阪大の歴史としては、昭和44年、釜洞さ

んが総長になられて昭和50年退官、続いて若槻さんが総長となられ、4年間、54年ぐらいまでの約10年間というのは、やはり紛争とその余波の時期だったと思うんです。

そういう紛争とその余波の時期に、文学部が1番いろいろ紆余曲折をして、人間科学部を創設したり、日本学というようなものを創設したんです。その日本学も、僕は前に学部長のときの感想を申しましたように、よその古い大学の文学部からは、何か思い付きでやっているというふうに見られたらと思うんですね。

日本学のことは、私の学部長時代のことなので申しますけれども、これもいろいろといきさつがありました。最初は、私が学部長になった昭和49年4月より前に、美学科の創設がありました。この美学科のことを先に触れておきます。

美学科をつくろうという構想は、これは亡くなった方だから、「君、そんなことを思っていなかったよ」と言われるかもしれませんが、哲学科の高橋昭二教授。この方は京大の哲学の出身で、僕よりお歳は若かったのですが、阪大の着任は古くて、澤瀉教授の助手時代から、助教授、教授になられた、非常にしっかりした方です。僕は筋道から言えば、この人を中心に動いていたと思うんですね。

美学科をつくるときに中心になられたのは、その高橋教授と木村重信教授でした。この方も京大の哲学のなかに美学があり、その出身です。

木村重信さんは僕より少し若いのですが、アフリカのあたりの美術考古学・民俗学などいろいろな業績がある方で、おそらく高橋教授と木村教授とは、京大の哲学科でほとんど同じくらいだったと思うんですね。そういう関係もあったのではないかと思います。哲学科に近い学科の拡充として美学科をつくったらどうかというようなことが、おそらく高橋教授の頭にあったと思うんです。

それで僕は、そのときはまだ学部長ではなかったのですが、評議員をやっていたから、美学科のそういうことがあるというので釜洞総長に、文学部で誰が考えているとは言わないけれども、「美学科くらいつくったらどうかと思っているんですけど」と言うと、「いや、それはいい。いまごろは学園紛争をやっているような学生ばかりだから、真善美ということで、美があってもいい。文学部だから人間の心とか人間を考えるうえで、やはり美学というものは非常に大事だ。それはヨーロッパを考えたらわかるよ。」と。釜洞さんは元来微研（微生物病研究所）の教授だったけれども、豊かな文学的素養の持ち主で、旦齋と号されて書も堪能だった人らしい言葉でした。

それで私が、そういうことを文学部に持ち込みました。特に骨を折られたのは、まだ助教授だった哲学の高橋さんで、その主任教授である澤瀉さんも、そういうお考えをブッシュされたと思うんですね。

ですから、その発想は、文学部の哲学科にあったと言ってもいいと思います。これは、釜洞総長が非常にブッシュして下さって、概算要求の学内順位ではトップにしてくれたんですね。それで、これはわりに早く、うまくできたと思うんです。文学部に美学科ができたのは、釜洞さんの肩入れがあったからで、良き「紛争の産物」だったわけです。ほかの人は、あまり知らないかもしれません。そういうことがありましたね。

まだ私が学部長になる直前に美学科は創設されて、まず木村重信さんが美術史の主任教授に着任して、それから講座がだんだん増えていくわけです。そして、僕が学部長時代の昭和50年になってから、芸能史や演劇学、文芸学という講座が増えました。

日本学専攻の創設

梅溪 別の流れで、いわゆる日本学専攻というのでできるのですが、もちろん文学部には出発のときから文学部に国文学講座というのがありました。これは小島吉雄教授という九大から来られた先生でしたが、『新古今和歌集』の研究で著名で、また大阪の和学の研究でも非常に業績がある方で、私は隣接の国史学講座の助教授でしたから、大変お世話になりました。

そして、その助教授は田中裕さんというお方。私と同じ七年制高校の甲南高校出身で、私より3年ほど先輩で、僕の前の学部長でもありました。僕はそのあとを引き継いだんです。

その国文学の第一講座の次に、昭和39年に第二講座みたいなかっこうで国語学講座ができました。田中裕先生は国文学で有名な方で、学部長もなさいましたが、お人柄から、おそらく私のようなお話はなさらないと思いますけれども、田中先生はご健在ですので、何か機会がありましたら、ぜひ阿部さんにはお目にかかっていただきたいと思います。

阿部 はい。

梅溪 私は、日本学専攻のみなもとは、文学部の国語学講座にあって、その充実・発展の1つの結果だったのではないかと考えているんです。田中先生のご見解はどうか知りませんが。僕はよその講座の教授でしたから、よくわからなかったのですが、国語学の講座には、現代日本語というものを専門にするスタッフがいるというような話だったと思います。私の受け取り方は、国語学講座の宮地裕さんが非常に積極的であったと思うんですね。

そのころ、現代日本語研究所といったようなものを考えておられたのではないと思うんですね。

しかし、やはり予算の関係があったのか、それとも本省方針が、もう国立大学にプチ研究所はつくらないということを、僕は学部長になっ

てから、聞いたことがあります。それで結局、そういう研究所はできなくて、昭和49年に大学院のみの日本学講座が、文学部に増設されたんですね。

それで結局、この日本学講座が現代日本語というようなものを主流に考えていたことが尾を引いて、やがて日本学専攻のようなものを何とかしてつくりたいという話になったと僕は思います。

昭和49年4月学部長になってから、本省へ行くことが多かったのですが、それはもっぱら日本学専攻のためでした。日本学専攻のことで、教授会でも、それを概算要求に出す、出さないで問題になって、本省ともあらかじめ日本学専攻の折衝をしたわけですね。

それで私の日記では、「昭和49年8月27日、午前9時、文部省前で宮地氏と落ち合う」と。私は宮地さんに説明してもらおうと思って連れていったんです。「大学学術局へ、日本学専攻の件にて説明に赴く」とあります。大学からあとで正式に出すからと、あらかじめ説得に行ったんですね。そうしたら、佐藤禎一という課長補佐や大崎仁課長など、3人ほどが出てきて、学術局長には面会できなかった。本当は木田宏局長に会いに行こうと思って行ったのですが。

局長の木田さんは、前回に申しました教育学の駒田教授と非常に関係がありまして、阪大の学内の開放講座に予算を付けてくれたのも本省の木田さんだったんですね。そんな関係もあって行ったんですが、そのときは局長には会えず、大学学術局の大崎課長や、ほかの課長補佐とかに説明したんです。

それから、文部省には講座の新設について審議会があるのですが、そのときの委員が森克己先生と竹内理三先生。みんな九大の日本史の先生でした。その両先生に会うのですが、日記では9月19日に、明日は大学の設置審議会の委員の先生に会うんだからと、もう1度、確認のために臨時教授会を開いています。

そして、その明くる日の1時半から2時半まで、学士会館の談話室で森克己・竹内理三両先生にお目にかかり、お名刺をいただいたのですが、「大学院設置審議会委員」ときちんと肩書きが書いてありました。そして、竹内先生はあまり言われなかったのですが、森克己さんは「君ねえ、阪大の文学部ともあろうものが、何でこんなものを出してくるんだ。こんなもの、なっていない」と盛んに言われました。

なっていないという理由は、こんな案は羊頭狗肉の感があると。日本史も入っていないじゃないか。もっと日本学にふさわしいようにされたいと。日本学というものが何もわかつたらんと。森さんが日本学をどう考えておられたかは、わからないんですけどね。そして、こんなものを絶対に通すわけにいかんと叱られたんです。

さらに、森さんは「日本の大学が日本学とは何ごとだ」と言われた。それはそうですね。外国人が外国で日本学というならいいけれども、日本で日本学というのは何ごとだと。ですから苦し紛れに僕は、「いや日本人の箸を使っている風習というのは、東南アジアでも箸を使っているし、インドネシアへ行けば高床式で、正倉院のあれとよく似ている。つまり日本文化の源流はみんな南にあるんだから、そういうことを広く知って、将来、日本から外へ出て、日本のことを大いに世界へ紹介する、あるいは日本のことを勉強する外国人の手引きをするような、そういう人材を日本でつくるんです」と言ったんです。しかし、「こんな案を出してくる阪大の文学部はだめだ。このままでは、承認せん」と言われたんです。

それで僕は困りまして、もう8月中は臨時教授会を何回開いたかわかりません。そして一方、本省は本省で、もし日本学専攻を設置するのなら、文学部の現存の講座を1講座ないし1講座半、はき出してくれと。これもまた、文学部の教授会で承認を取るのがなかなかできない

んですね。どこの講座も、みんな足りないから。しかし、あるところから1講座を出さなければ、この講座ができないと言う。これで文学部長は立ち往生しまして、にっちもさっちもいなくなっただけです。

そのときに私が、本省がこういうことでもいいのかと思ったのは、大学課長から私のところに電話で、「まあ学部長、あまり心配しないでいい。大学学術局としては、自民党の文教部に通じてある。また、ジャパノロジーといって大蔵省の了承もだいたい得ているから」と言ってきたからです。

それを聞いて僕は、正式の大学の設置審議会の委員が、それはだめだと言っているのに、何で本省がそんなことを言えるのかと不思議に思ったんです。

こんなことは教授会では言えませんから、本省の態度は大変厳しいので、やはり文学部としては1講座出すことをのまなければ日本学専攻はできないと。文学部の教授会が1講座出さないと言うのだったら、学部長として本省へ行って、うちは出せませんから、この設置申請を取り下げますと言ってよろしいかと言いました。

そうしたら、私の京大の先輩で西洋史の豊田堯教授が、「学部長があんなに言っているから、まあ何とか了承したらどうか」と助け船を出してくれて、やっと文学部の教授会で1講座出すことにしたんですね。

それでも出すところがありませんから、私がいる国史から1講座を出すしかない。これはちょっと忘れましたが、ややこしいことをしました。私が学部長を引き受けている以上はしかたがないから、国史から出すことにし、まだ専任が決まっていなかった美学科の講座があったので、それを国史が借りて、日本学専攻の講座が充足したら、国史の定員を2年か3年以内に必ず返してもらうという条件を付けてやったと思いますね。大変いろんなことをしたと思います。

それで結局、日本学専攻の申請書を文学部で出したのが10月22日のことです。日本学専攻設置申請書の原案を訂正して、小西庶務掛長から本省へ連絡してもらった。

そのあと、また11月21日ごろに教授会を開いて、翌22日に本省へ行きました。1時に本省へ行って、1時半に大学課の佐藤課長補佐と会い、設置の予備審の空気、監査について聞いたんですね。

予算のほうは何とか話が付いているけれども、設置審議会の話では、日本学としては非常に狭すぎると。そして、これは僕もわからないのですが、「日本精神史のような」と。これはたぶん、戦時中の「日本精神史講座」のようなということかとも思われますが、そんな内容はなかったはずですよ。

そういういろんなことを言われました。これは、おそらく森克己さんの意見で、本省の大学課がその見解を取ったんですね。ですから、やはり審議会では阪大の申請書はだめだと。これが11月の段階ですよ。

そして、その空気を教授会に伝えると、大学ではどのようにしようかと困りましてね。しかし依然として、大学学術局長は私に、設置審議会の空気はあまりよくないけれども、予算は必ず通るから、そう心配するなと。しかし先ほど言ったように、それは設置審議会の先生のお顔をつぶすようなことだから、どのようになるのか、私にはいまだにわかりません。ただ、この申請書そのものは僕は通っていないと思います。

やがて、また電話で、本省の事務局長から定員1名を出せるかと確認を受け、それで結局、これを正式にのむことにしました。そのために、クリスマスイブの12月24日午後3時から、僕は事務長を連れて、大阪で臨時の日本学専攻会議者関係会議を開き、どうするか協議し、定員1講座を出す旨、事務長から本省へ返事をさせました。

それで何とか本省は了承したと思うのですが、何度も繰り返しますように、問題は設置審の先生方があまり好感をもたれていないと。それは大学学術局長も言っているのですから、そのところがいまだに私にはわからないんです。阪大に日本学専攻が設置されたことについて、森克己先生や竹内理三先生がどう思われたのか。私は叱られたものだから、おかげで通りましたと言うのは気まずくて、とてもごあいさつできなかった。

そんないきさつで、いまでも設置審と大学学術局とのあいだの関係はよくわからないのですが、阪大で1講座を出すということで、おそろく了承を得たと思います。

それと同時に26日には、東京に行っているついでに、国語研究所所長の岩淵悦太郎先生に初めてお目にかかって、徳川宗貫氏の日本学専攻就任のための割愛状をいただきました。そのときは徳川氏に会っていませんが、あらかじめ話を通じていたのか、岩淵先生は承知したとおっしゃって下さいました。

そして10時には、中西末松文学部事務長を帯同して文部省大学課にお礼と離京のあいさつに行った。ですから、24日、25日、26日と3日間、事務長と2人で学士会館に泊まったことを覚えています。そういうことをして、この日本学専攻がやっとできたんですね。

このときは本省の言うこともぐらぐら変わって、足のない専攻をつくると。足のないというのは、学部にはない大学院専攻みたいなものですね。これは本省の課長の言うことがはっきりしなくて、7月から8月にかけて、行くたびに1講座半とか2講座とか話が変わるんです。ですから、これを教授会に持って帰ると、教授会では「学部長は何を聞いてきているのか」といわれ、そのたびに私は「いや、本省の言うことが変わるんだから」と弁解した次第。

このときに本省でどういう考えがあったのか

というと、要するに学部には足のない、いわゆる大学院専攻だけの日本学専攻をつくろうとしていたんです。これは阪大文学部が初めてなんです。そういう、ちょっと変わった専攻ができました。

菅 たぶん同じころに広島大学で総合科学部というのをつくりまして、そのときも木田局長だったんですが、彼なんかは総合科学部を基礎として文学部・理学部は独立大学院のような感じに持っていきたいと考えられていたようです。結局は、文学部と理学部の反対で、そういうふうにはならなかったんですけども。

梅溪 だから僕は、本省でもいろんな議論があったんだろうと思うんです。行くたびに変わるから。向こうも気の毒に、わざわざ本省から学部長あてに電話をかけて下さる。

それで結局、大阪大学のホームページにも、昭和50年度のところに「前記の日本学講座を廃し、大学院のみの日本学専攻に日本文化学講座と比較文化学講座を設置」したと書いてあります。この大学院のみの日本学専攻ということになっているんですね。

これが、いま菅先生がおっしゃる総合科学部みたいなものです。これは学部にはないんですね。旧来の文学部のわれわれとしては、ちょっと合点がいかなくて、本省が言われることもわけがわからない。また大学院だけというのは文学部の足のない。大学院というのは法的にはありますけれども、実際にはないわけでしょう。

大学院の教員も事務員もいない。ただ文学部の教員と事務員に、大学院のことをちょっとやらせているみたいなものでしょう。結局、本省でも、大学院を置く大学をつくるときの移行過程だったんでしょうね。ですから、こんなややこしいことが。いま先生が言われたように、やはり広島でもそういうことがあったのでしょ

う。ですから、これは阪大だけではなくて、戦後

の文学部を全国的に、本省でどういうふうに持っていこうとされていたかを示す実験例とも考えられるし、また、将来、文学部をどういうふうにしようと思っているのか。これは大学自体の問題でもあったんです。

本省の考えを云々するよりも、本来はわれわれ文学部自体が考えなければいけないことですね。文学部の創立50周年記念の際に、「文学部は生き残れるか」ということを考えておかなければいけないことからすれば、今後、1つ考えていただけたらよろしいのではないかと思います。

これで、私が学部長時代前後の美学科、日本学講座、日本学専攻ができたところのややこしい、あまり筋道が通っていない話は終わらせていただきます。この時期は、まだキャンパスに入るのに入校証がいるとか、紛争状態であったりして、とても騒がしい思いをしたことを覚えています。そういうことで、私の学部長時代は終わりました。

学部と大学院

梅溪 もう申しませんが、九国立大学文学部長会議の要望書の内容、もちろん各学部ごとのこの種の要望書がどのようになっているのか、大学史の観点から誰かに論文を書いていただいたらいいと思います。これらの要望書は作文ですけども、一応、全体の動きも示しているわけですから。

阪大の概算要求書というのは、北大の文学部長が言われたように、文学部のそのときの思い付きかもしれないけれども、思い付きのなかにも一分の魂はあるわけで、それは先行して充実した東大や京大などよりも、新設の学部だから、新しい阪大だから、何か特色を持ってもいいと思います。この概算要求書も各大学の歴史の重要史料であり、『百年史』の際には検討して下さい。

しかし、いまの現状としては、やはり北大の北方文化研とか、東大は史料編、東洋文化研ほかを持っているし、京大も私がいた人文研ほかがあり、九大は九州文化史研を持っている。阪大の人文系学部の歴史で言えば、前回申したかわかりませんが、宮本又次さんが九大におられた関係で大阪にも文化史研究所をつくろうといわれ、文・法・経で努力しましたが、挫折したわけです。

僕は適塾を中心にして、緒方洪庵は医学者・蘭学者・医師・文化人でありましたから、何か新しい構想でそういうものをつくっていただけたらと思います。

では、いまは文学部というものはなくなったんですか。

阿部 いえ、ございます。文学研究科が、表看板になってはおりますが。

梅溪 そうですね。しかし、いまは大学院文学研究科が看板で、文学部が霞んでしまい残念です。土台であり足元は文学部だという自覚を促したいですね。どの学部でも。

われわれのいたときには、文学部が講座の中心で、文学部の教授が大学院の授業担当をしておりました。それはプロパーの、大学院にふさわしい講義をしていたかと言われれば、私なんか内心じくじたるものがありますが、文学部の講義と同じ内容をやっていたわけですよ。しかし、学部であれ、大学院であれ、研究・教育者は誰でも全力投球しているわけで、教壇は学生相手の戦場といわれた恩師がおられました。

阿部 実態は同じだとは思いますが、建前は、まず先生方が大学院へ行って何を担当されているのかが、表に出るようになりました。

梅溪 それは受ける学生から言えば、どうなんでしょうね。

阿部 大学院生が非常に増えましたので、変わってきてはおります。

梅溪 そうしたら、いま文学部だけを卒業する人はいないんですね。

阿部 いえ、昔どおり文学部を卒業する学生たちもいて、その数は特に変わっていないと思います。ただ、以前に比べると大学院生がかなり増えて、その人たちを教えることも主な仕事になったということです。

梅溪 私は古い人間だから。

昔のことを思うと、やはり1階と2階とが非常に大事で、阿部先生もわかりきったことですが、昔のわれわれの制度から言えば、教養部から文学部へ上がって、文学部から大学院へ上がる。そこで同じ教授に3年も5年も付き合わされたら困るんですよ。

外国の大学では、そんな人はあまりいないと思うんです。僕はミシガン大学にいたときにもタッチしましたが、アンダーグラデュエート（undergraduate）でミシガンにいた人が、そのまま大学院へ上がってくるというのは、わりに少ないんですよ。だいたいハワイとか、よそから来ます。アンダーグラデュエートはハワイで、ミシガンのグラデュエートコース（graduate course）へ来るとか。

そしてミシガンのアンダーグラデュエートを卒業したものも、学力によっては、教官がよその大学に推薦状を書いていますね。

日本のように、自分が通っているアンダーグラデュエートがすんだら、みんなグラデュエートへ上がっていくというのは、僕はどうかという気がするんですね。吉田松陰ではないですが、1度お目にかかれれば、だいたい相手がわかるでしょう。僕たちみたいに同じような講義に4年も5年も付き合わされたら大変ですよ。それは学生のためにいいことではないと、僕は思うんです。

僕は学部長のときに、国立大学の教官はたらい回しにしたらどうかと言っていたんです。僕らは薩摩藩をやろうと思っていたから、2年だけは鹿児島大学の教授にすら替えして、またどこかへ回ったらいいと。特に日本史をやっているのは、そのほうが勉強するのにありがたい

でしょう。学生をたらい回しにするわけにいかないから。

そういうことも旧来の制度ではできなかったんです。外国の大学はほとんどドミトリを持っていて、みんな寄宿舎を持っていますから通うのは便利でしょうけれども、とにかく、そのアンダーグラデュエート、グラデュエートとずっと下から上がってくるというのが、学生の力が伸びるのにいいのかどうか。もう1度考えたらどうかなと思うんですね。

阿部 それは難しい問題だと思います。

梅溪 大学院のレベルを上げるのであれば、大学院専任と学部専任を置くべきです。しかし、大学院担当教授といっても、みな本来の学部教授の兼任でしょう。両方を持たされたら大変ですよ。文部省は大学院専任の教官と事務官と、アンダーグラデュエートの専任の教官と事務官とをつくってないでしょう。兼任にしているでしょう。だから文部省の教育予算がおかしいと思うんです。やはり、これはやめるようにしないと日本の大学は向上しないと思う。それこそ外国人教授を雇えませんか。もう少し、こういうことを考えたらどうかなというのが感想（笑）。

甚だつまらないことを申しあげて失礼ですが、お許しいただきたいと思います。

適塾・懷徳堂について

阿部 先生は、阪大のルーツと言うべき懷徳堂と適塾、それから含翠堂にはご造詣が深く、このあたりにつきまして、これまでにもご著作のなかで、たびたび触れてこられましたけれども、簡単にお話しいただけますでしょうか。

梅溪 適塾のことは、『よみがえる適塾 適塾記念会50年のあゆみ』（大阪大学出版会、2002年）を、大変恐縮ですが読んでいただいたら。あれには、私が記録のために持っていた史料もそのまま入れて、各学部の先生方にお骨折りい

ただいたり、今村総長はじめ各歴代の総長が記念会長としてお尽くし下さって、オープンにした適塾の建物の管理とか、事務の方など、お手伝いいただいた方のことも書いてございますので。たいしたものではありませんが、史料として残しておこうと思って書いておきましたので、ご参考になればと思っております。

懷徳堂のことも、いまの懷徳堂の方が数年前にお書きになりましたけれども、最初は私が関係していたんです。前回申しあげましたように、阪大の文学部創設のときの、いわゆる基本図書になったのは、財団法人の懷徳堂がお持ちであった懷徳堂文庫と言っているものです。そういうものに、大原の社研（大原社会問題研究所）の図書とかいただいて文学部をつくろうということが、その当時の今村総長時代のご構想だったようです。しかし、大原の社研のものは来ませんでした。あれは大阪府立中之島図書館の分館である天王寺の図書館にありましたが、結局、法政へ行ったと思います。

その財団法人の懷徳堂記念会のものをいただくについては、やはり今村総長のお力が大きく、大阪財界で今村３兄弟と言え、誰も知らない人はいない。これは、よく僕たちが聞かされたことで、こんなことを言っているかわかりませんが、阪大の総長になって大阪の財界にあいさつに行かなくていいのは、今村さんだけだと。住友の堀田会長などとも心安かったし、歴代の住友関係の方が財団法人の理事や理事長をしておられたこともあって、懷徳堂の図書を阪大がいただいて文学部ができたということですね。

いま図録『懷徳堂－浪華の学問所』（懷徳堂友の会・大阪大学出版会、1994年）が出ています。以前には阪大に懷徳堂文庫が入りました当初の中国哲学の木村英一教授の小冊子『懷徳堂の過去と現在』（大阪大学、1953年）がありましたが、いま絶版でしょう。私は着任後、木村さんのお手伝いをし、古い堂友会の人々とも関

係がありましたので、史料として懷徳堂のあゆみを書いておこうかなと思っています。

懷徳堂記念会から文学部が本をいただくときに、財団法人とのあいだに契約がありまして、懷徳堂記念会の職員で庶務をやっておられた藤塚誠二さんというお年寄りの方について、その方のお部屋とか待遇とか、いろいろなことを承知しましたという契約をしたんです。しかし僕に言わせれば、あまり実行していないんですね。

その藤塚さんという方が、阪大に移ってからの図書の整理や配架などを全部されて、お守りをして下さった。また、懷徳堂には堂友会という懷徳堂の同窓会みたいなものがあって、大阪のまちの方々、その方々が何か講座を開かれるというときも無償で奉仕されていたんです。そういう方のお力もずいぶんありました。

そして今度は、阪大の文学部が主催者となって、昔からの懷徳堂の行事を行うようになりましたが、懷徳堂記念会の役員や、古い会員である堂友会の方々のお骨折りで出発してきたんですね。ですから文学部としては、そういうことを忘れてはいけないと思うんですね。

そして文学部の教授会としては、1番直接的に懷徳堂文庫を担当する責任講座として、中国哲学講座がふさわしいだろうと決まりまして、その最初の中国哲学の講座主任が木村英一教授。この方は、私のいた人文科学研究所の東方部の所員で、京都の方でした。

木村さんは人文研で、東方部と日本部は違いますけれども、僕のことをよく知っておられたものですから、いろいろ手伝ってくれないかと言われ、お手伝いさせていただきました。木村教授からは、まず最初に図書館の協会から出た『日本の文庫のあゆみ』か何か、そんな本に、懷徳堂文庫の紹介をさせてもらったことがあります。そんなことで滑り出しをやりました。それから昭和51年に『懷徳堂文庫図書目録』ができました。

それまでに、木村英一先生は図書館長などもなされて、自分も直接に懷徳堂の世話役でしたから、ずいぶん懷徳堂を大事にされました。図書館の増築のときには、懷徳堂文庫を1カ所にきちんとまとめるということで、いまは6階でしょうか、そういうときも木村館長がいろいろお骨折りになった。

そのときの目録には、懷徳堂記念会があちこちからいただかれたものもあるし、阪大に入ってから、木村さんが懷徳堂文庫のなかに追加されたものもあるんですね。そういう目録がいくつかあったので、それらを合わせて『懷徳堂文庫図書目録』というものをつくりました。そのときには、わずかなお金ですが、私は本部に50万円ほど金を出してくれと頼んで、下手な字で「懷徳堂図書目録」と背文字を書き、発行者が文学部でしたので、学部長としても、木村さんに教えていただき、文庫の由来を記した刊行の辞を書いております。

そのほか、堂友会の人たちや見学旅行のことは、私は『懷徳』という雑誌のなかに少し書いています。また、藤塚さんからいただいたものなど、僕が持っている史料で確かめてみて、書き残しておきたいところを『懷徳』の雑誌に寄稿しておけば、それで片付くと思うので（笑）。

阪大生へのメッセージ

阿部 最後に、阪大生へのメッセージをひとこと賜りたいのですが。

梅溪 僕は辞めるときに2つの大学新聞のどちらかにインタビューをされて、僕はシベリア帰りなので兵隊の軍事のことをやって、そのへんでお雇い外国人をやったとか、いろんなことを申した揚げ句に、大阪大学にとどまって大阪に長くいましたから、やはり大阪の研究を十二分にやってほしいと申しました。

最近でも、岸本忠三先生が、いま大阪大学で

は“地域に生きる”といわれているし、九大でも九州経済文化史の秀村選三さんたちが僕らと同世代で頑張っているんだから、やはり大阪も大阪のことを、もう少ししっかりやらなければいけないと思いますよ。

大阪は江戸時代天下の台所で、年に何百万石という米が集まったところで蔵屋敷もたくさんあったのに、いまは蔵屋敷を全部つぶしてしまつて1つも復元していません。大阪の全面的沈下はひどいですね。阪大も“地域に生きる”には大奮起してもらいたいと思います。そのためには、もう少し独創的な大阪研究をやる人が出るようにね。

僕は退官の前の2年間は「大阪学問史」という講義をしたんですよ。しかし、何の反応もなく、学生が卒業論文を書くのに、せっかく懷徳堂文庫もあるのに、それを見ないで、よそへ資料を集めに行くんです。これは中哲（中国哲学）の人も、日本史の連中もみんな同じです。なぜ活用しないのかと思いましたね。文庫目録があり、いつでも現物があるのに、おそらく図書館に入って見た学生が何人いるんでしょうか。

僕の恩師の1人であります蔵内数太教授という社会学の先生がおられます。先生は九大から阪大文学部創設のお1人としてこられた方で、横文字を縦にした社会学ではなく、日本の古い文献や古典をよくお読みになる方で、関西学院大学生活協同組合出版会から『蔵内数太著作集』というのが出ています。正倉院にあるような鏡の文様の解釈とか、天理教の問題とか、いろいろなことをされている。あの著作集などは、阪大の学生が読めばいいなと思うんですけどね。

その蔵内さんは、「君、歴史をやっているんだから、大阪を通り過ぎた、西のほうから来て江戸へ行った、江戸から長崎へ行った、そういう大阪を中心にした文化人の往来年表をつくったらどうか」、また、「歴史をやっている者は年

表をつくるのが大事だ」と僕に言われました。年表をつくれということを、蔵内先生自身も恩師から言われたそうです。

僕が『お雇い外国人』のシリーズをやったときには、『日本近世英学史』で著名な重久篤太郎先生が、自分でつくられた年表を見せて下さいました。重久先生は同志社の教授でしたが、京大の新村出先生の秘書をやっておられた。その新村先生は、時代に応じて自分の年表を何冊もつくっておられたので、重久先生もつくられたんだと聞き、私も、その影響を受けているんですけどね。

しかし、蔵内先生からの「大阪を通った文化人の往来年表」は、いまだに僕は手を付けてないのですが、大阪研究として有意義と思います。

やはり年表をつくるというのは、われわれにとって大事なことです。年表はそれぞれの人によって、世界史との対比年表があるし、日本史のなかでもいろんな年表のつくり方があるだろうから、それをにらんでいたら何か出てくるというのが、蔵内さんの言われていたことでしたね。

蔵内さんは阪大にとって、懷徳堂や適塾について実に貴重な学問的業績を遺して下さいました方で、「懷徳」および「適適斎」の名の出典について新見解を示し、かつ懷徳堂と適塾が学問的に相通じ、相互補完するものがあるのを論証されているのです（前出『著作集』第5巻）。

そういう方が、やはり適塾にも関係し、懷徳堂にも関係されたんですね。だから僕はちょっと遺言めいているんですが、懷徳堂記念会は昔から先賢祭をやっているのだから、適塾記念会も先賢祭をやればいいと思う。蔵内先生などは、どちらの先賢でもあります。

私は『適塾』にも書いておりますが、微研の藤野恒三郎先生は、おじいさんは適塾生で、適塾記念会の元祖みたいな方なのですが、その藤野恒三郎先生と、僕の主任教授だった藤直幹先

生、藤さんと同列だった文学部の国文学の小島先生と、社会学の蔵内先生、森東吾先生が、適塾記念会の先賢として追慕し、その継承・発展を期することは意義のあることと思います。

なお、蔵内先生は今日の「適塾記念会」という名称の名付け親で、「懷徳堂記念会」という名前があるから、それと対がよいと今村総長に進言されて、それに決まり、また森東吾先生は本部事務局にも関係されており、今村総長の式辞に“懷徳堂と適塾は阪大の車の両輪”であるという言葉を入れられたと聞いています。

また、藤野先生や蔵内先生は、関西日蘭学会でもよくお会いしましたが、緒方洪庵先生はオランダ医学を日本で生かし、適塾はそういう役目をしたんだから、オランダとも仲良くして、阪大の学生がオランダへ留学したらいいではないか、ライデン大学とも提携したらいいではないかとか、いろいろなことをおっしゃったんです。

ですから、もう1度、そういうことを考えるべきだと思います。私はこれらの諸先生から、適塾をやったために、いろんな教えを受けたのを、停年退官前に学生諸君に受け売りしたんです。何とか、阪大の学生諸君にバトンタッチをしていただくために。

かの『扶氏医戒之略』というのは洪庵がオランダ訳を訳したのですが、オランダ訳の原書はフーフェランドのドイツ文であるから、そのドイツ文の内容と、オランダ訳および洪庵の日本語訳の3者について、医学や薬名、病名その他について、詳しく比較研究してくれれば。そうすれば、医学部の大学院の学生でもピー・エッチ・ディー（Ph.D）を出すと言ったんですね。そんなことをする人は、いまだにいないのです。

あと3年すると洪庵生誕200年になりますので、適塾記念会では、『緒方洪庵全集』をつくる計画が動き出しているんですが、何しろ「全集」のことですから、特に十分な解題が書ける

か否かで、その真価が問われます。したがって、全集編集委員会を組織して十分の論義を経て、洪庵の主著、草稿、写本、日記、書翰、和訳等について、これまでの研究史を検討のうえ、現次における十分な解題が掲載できるよう、最適任の執筆者にご依頼をお願いしたいと思います。特に医学書に関しては、日本医史学会の会員のなかには、『扶氏経験遺訓』その他洪庵著作についての研究者もいらっしゃると思います。これらの方々にはできるだけご参加ご協力いただくのがよいでしょう。

阪大で“平成の適塾”とか“適塾は阪大の源流”といいながら、適塾研究者が阪大関係、特に医学関係者にほとんどいないことは残念です。『全集』の解題者に1人も阪大の医学関係者がいないようなことにならないようお願いしたい。

ですから医学部の人にも、もう少しその事情は知ってもらわなければ困ると、僕は医学部長さんをお願いしようと思っています。あるいは、門田守人先生は僕のお世話になっています主治医で副学長だから、いっぺん先生から

でもお願いをしておいて下さい。

約束から言えば、緒方富雄先生は蘭書を譲るからきちんとした資料館をつくってくれと、資料館をつくるお金がなかったら、寄付を集めればいいではないかとおっしゃったんです。その条件で適塾に蘭書をもらっているのに、緒方家に対して不履行なんです。ですから、そういうことをきちんと手当するよう、大学にしっかりやってほしいです（笑）。

最後に、『五十年史』の際に、医、理、工の各部局に、戦時中の陸海軍からの委託研究や、内閣発令による「戦時研究員」の件について執筆をお願いして、一部の学部で執筆にご協力いただいたように記憶していますが、結局、教授会で掲載は拒否となりました。東大の『百年史』はどうか確認していませんが、阪大の『百年史』ではどうするか、いまからお考えおき下さい。戦時中の軍学協同の実態は、何らかの形で調査研究して、日本の科学技術史の史料として残しておきたいです。

阿部 長時間、どうもありがとうございました。

Memoir of Osaka University Talked by Emeritus Professor Noboru Umetani (2)

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Emeritus Professor Noboru Umetani related to the history of Osaka University. After the 1960s Professor Umetani played an important role at the administration of the Faculty of Letters in Osaka University. In this talk he referred to the foundation of the Faculty of Human Sciences in 1972, to which three departments, psychology, sociology and education, were moved from the Faculty of Letters, and the establishment of two unique divisions in the Graduate School of Letters, namely, aesthetics in 1973 and Japanese Studies in 1974. He also recalled Tekijyuku and Kaitokudo, the protection of which Professor Umetani energetically proceeded.